

白樂天

世阿弥作

前

ワキ 白樂天

シテ 漁翁

ツレ 漁夫

後

ワキ 前に同じ

シテ 住吉明神

地は 肥前の海

季は 雑

ワキカゝル

「そもくは唐の太子の賓客。白樂天とは我事なり。」

詞

「さても是より東に当つて国あり。名を日本と名づく。急ぎ彼土に渡り。日本の智恵を計れとの宣旨に任せ。唯今海路に趣き候。」

次第

「舟漕ぎ出て日の本の。く。其方の国を尋ん。」

道行

「東海の。波路遥に行く舟の。く。跡に入日の影残る。雲の旗手の天つ空。月また出づる其方より。」

山見えそめて程もなく。日本の地にも着きにけり。く。

詞

「海路を経て急ぎ候ふ程に。是ははや日本の地に着きて候。暫く此所に碇をおろし。日本のやうを詠めばやと存じ候。」

シテ、ツレ一声

「不知火の。筑紫の海の朝ぼらけ。月のみ残るけしきかな。」

シテサシ

「巨水漫々として碧浪天を浸し。」

二人「越を辞せし范蠡が。扁舟に棹を移すなる。五湖の煙の波の上。かくやと思ひ知られたり。あらおもしろの海上やな。

下歌「松浦潟。西に山なき有明の。

上歌「月の入る。雲も浮ぶや沖つ舟。く。互にかゝる朝まだき。海は其方か唐の。船路の旅も遠からで。一夜泊と聞くからに。月も程なき名残かな。く。

ワキ詞「我万里の波濤を凌ぎ。日本の地にも着きぬ。是に

小船一艘浮べり。見れば漁翁なり。如何にあれなるは日本の者か。

シテ「さん候是は日本の漁翁にて候。御身は唐の白樂天にてましますな。

ワキ「不思議やな始めて此土に渡りたるを。白樂天と見る事は。何の故にてあるやらん。

ツレ「其身は漢土の人なれども。名は先立つて日本に聞ゆ。隠れなければ申すなり。

ワキ 「たとひ其名は聞ゆるとも。それぞとやがて見知る事。あるべき事とも思はれず。

シテ、ツレ 「日本の智恵を計らんとて。楽天来り給ふべきとの。聞えは普き日の本に。西を詠めて沖の方より。船だに見ゆれば人毎に。すはやそれぞと心づくしに。

地 「今やくと松浦舟。く。沖より見えて隠れなき。唐舟の唐人を。楽天と見る事は。何か空目なるべき。むつかしや言さやぐ。唐人なれば御詞をも。

とても聞きも知らばこそ。あらよしな釣竿の。暇をしや釣垂れん。く。

ワキ詞 「なほく尋ぬべき事あり舟を近づけ候へ。如何に漁翁。さて此頃日本には何事を翫ぶぞ。

シテ 「さて唐土には何事を翫び給ひ候ふぞ。ワキ 「唐には詩を作つて遊ぶよ。

シテ詞 「日本には歌をよみて人の心を慰め候。

ワキ 「そも歌とは如何に。

シテ「夫れ天竺の靈文を唐土の詩賦とし。唐土の詩賦を以て我朝の歌とす。されば三国を和らげ来るを以て。大きに和ぐと書いて大和歌と読めり。しろし召されて候へども。翁が心を御覧ぜん為め候ふな。

ワキ「いや其儀にてはなし。いでさらば目前の氣色を詩に作つて聞かせう。青苔衣を負ひて巖の肩にかゝり。白雲帯に似て山の腰をめぐる。心得たるか漁翁。

シテ「青苔とは青き苔の。巖の肩にかゝれるが衣に似たるとかや。白雲帯に似て山の腰をめぐる。おもしろしく。日本の歌もたゞ是候ふよ。苔衣着たる巖はさもなくて。衣着ぬ山の帯をするかな。

ワキ「不思議やな其身は賤しき漁翁なるが。かく心ある詠歌を連ぬる。其身は如何なる人やらん。

シテ「人がましやな名もなき者なり。されども歌を読む事は。人間のみに限るべからず。生きとし生ける

物毎に。歌をよまぬは無き物を。

ワキ「そもや生きとし生ける物とは。さては鳥類畜類までも。

シテ「和歌を詠ずる其ためし。

ワキ「和国に於て。

シテ「証歌多し。

地「花に鳴く鶯。水に住める蛙まで。唐土は知らず日本には。歌をよみ候ふぞ。翁も大和歌をば。か

たの如くよむなり。

地クセ「そもく鶯の。歌をよみたる証歌には。孝謙天皇の御宇かとよ。大和の国高天の寺に住む人の。しきねんの春の頃。軒端の梅に鶯の。来りて鳴く声を聞けば。初陽毎朝来。不遭還本栖と鳴く。文字に写して是を見れば。三十一文字の。詠歌の詞なりけり。

シテ「初春のあした毎には来れども。

地「あはでぞ帰る。もとのすみかにと聞えつる。鶯の

声を始めとして。其外鳥類畜類の。人にたぐへて歌をよむ。ためしは多く荒磯海の。浜の真砂の数々に。生きとし生ける物。何れも歌をよむなり。

ロンギ地

「実にや和国の風俗の。く。心有りける海士人の。実に有難き習ひかな。

シテ

「とても和国の翫び。和歌を詠じて舞歌の曲。其いろくを踊はさん。

地

「そもや舞樂の遊びとは。其役々は誰ならん。

シテ

「誰なくとても御覧ぜよ。我だにあらば此舞樂の。

地

「鼓は波の音。笛は龍の吟ずる声。舞人は此尉が。

老の波の上に立つて。青海に浮びつゝ。海青樂を舞ふべしや。

シテ

「蘆原の。

地

「国も動かじ万代までに。 (中入)

後ジテ

「山影の。うつるか水の青き海の。

地 「波の鼓の海青楽。 （真の序）

シテワカ 「西の海。 あをきが原の波間より。

地 「顕はれ出でし住吉の神。 住吉の神住吉の。

シテ 「顕はれ出でし住吉の。

地 「住吉の。 神の力のあらん程は。 よも日本をば従へ
させ給はじ。 速に浦の波。 立ち帰り給へ楽天。

地 「住吉現じ給へば。 く。 伊勢石清水賀茂春日。 鹿
島三島諏訪熱田。 安芸の厳島の明神は。 娑竭羅龍

王の。 第三の姫宮にて。 海上に浮んで。 海青楽を
舞ひ給へば。 八大龍王は八りんの曲を奏し。 空海
に翔りつゝ。 舞ひ遊ぶ小忌衣の。 手風神風に。 吹
きもどされて唐船は。 こゝより漢土に帰りけり。
実に有難や神と君。 実に有難や神と君が代の。 動
かぬ国ぞ久しき。 く。